

私は、幕末に近い時代の太鼓台関係の古文書等に「蒲団」(主には太鼓台新調時に、或いは更改

4. 蒲団型太鼓台は、誰が広めたか。

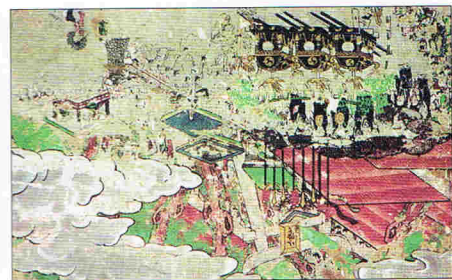
東日本・西日本の掛蒲団の違い(東=夜着、西=大蒲団)については、太鼓台(この時代の流行の主
体は蒲団型太鼓台)の各地への流布には大いに影響があったと考えている。そして太鼓台の蒲団の
数え方であるが、古文書には「畳」や「丈」と表記されている。(P85参照)これは、現在の各地太鼓台
の蒲団を数えるのも、畳(ジヨウ)からの転訛である「桑・重・丈」などを用いていることなど、現在
にもつながって大変興味深い。

大鼓台の蒲団を論じる対象は、あくまでも方形の蒲団(敷布団)である。ただ、次項で述べるが、
代が、近代の掛蒲団となる時代まで続いているという。『寝所と寝具の文化史』を引用)
の東日本では、上方のように大蒲団を使用した時代はほとんど見ることがなく、夜着を使用する時
代(敷蒲団)同様、庶民一般が入手できるのは、まだまだ後の時代である。ただ、遠州(静岡県)以東
夜着(よぎ)という襟袖が付いた綿入れの衣服様のもから発展したものである。しかし大蒲団も蒲
計との異論もあり、実際に庶民の間に大蒲団が広まったのは1840年頃からとされている)とされ、
図参照)大蒲団が上方で一般化し始めたのは18世紀前半(17世紀前半との説もあるが、この説には早
く、薄い上に掛ける蒲団は「大蒲団」と呼ばれ、敷蒲団に比べ時代的に遅れて登場している。(P79の
なお、現在における寝具としての蒲団は、掛蒲団と敷蒲団とで一式となるが、敷蒲団よりも大き

ものと思う。
られたのと同様、寝具の蒲団も太鼓台に採用されて「神様の寝具」として、尊ばれる存在であつた
れていたであろうと考える。それは、座具の蒲団が、高貴な僧侶や貴人たちに用いられたことで尊
蒲団(敷蒲団)となつても、使途目的が神様の夜間使用であることから、当然依代として意識せら
は、ない)と考える。ただ、神様が座す依代と位置づけられる蒲団(座具)は、寝具として使用する
は可能ではあるが、前述したように時代的に太鼓台の存在しない時代であるため、「円形の蒲団
蒲団型太鼓台の最初の蒲団は、方形のものではなく円形であつたのではないかとの考察も理屈上
蒲団型太鼓台(『撰津名所図会』夏祭り、難波神社の太鼓台)が描かれている。

が多い。同時に豪華な蒲団型太鼓台の情報発信地と目される大坂では、ほとんど現在のものに近い
形の寝具の蒲団が積まれている。現在と比べると厚みの薄いものがほとんどで、枚数も三畳のもの
なる姿が描かれている。そこに描かれている太鼓台には、当然ながら円い座具の蒲団ではなく、方
地の蒲団型太鼓台の絵画資料からは、小型・簡素ではあるがようやく今日の蒲団型太鼓台の原型と
坐禪の円い座具として用いられていたものであつた。また江戸時代後期の1800年前後に描かれた各
「蒲団」フツという漢字や呼称は、方形の寝具の蒲団(敷蒲団)が登場する江戸時代中頃まで、

小豆島町亀山八幡神社の太鼓台(台)
「奉懸当社御祭禮之図」(部分)



加古川市「神宮八幡神社御事絵図」(部分 姫路市・船谷宗閔氏提供)

